

感想

地名調査ごぼれ話

会員 市野 瀬 仁

はじめに

「元田の歴史」について、会員の方々には内容が分っているのにもかかわらず、多数ご購入下さった、ありがとうございました。暖かいお気持ちに對して、厚くお礼を申し上げます。

今年の五月頃、私は富川日本地名大辞典編さん事業の大分県版の執筆を依頼された。期限は九月三十日までであった。

兼子俊一先生へ元大分大津教授から前もって執筆依頼のあったとき、すでに「元田の歴史」の原稿は完了していたが、校正の仕事があるので、お引受けすることをかなり思案した。

しかし、やってみることにした。仕事を始めるに当たって、疲気をしてはならないこと、夏休み中にて完成すること。そのためには、公のことは別として、私事に關すること、省けるものはできるだけ押さえることに心掛けた。

地名辞典の仕事は、計画通り一か月前にはほぼ完了した。

今回は、その残務整理のつもりで、地名調査期間中に出合った印象に残ったことから、「地名調査ごぼれ話」として書き残してみたいとなった。

まず、佐伯市の地名について

○坂ノ浦

区長さんに聞くのが順序だと思つて、片刈藤雄氏宅を訪ねた。奥方から近くの田圃に居ることを聞かされた。本田造船所第三工場のある所である。

そこに、坂ノ浦の加藤虎雄氏が道端にいて、仕事の中、区長さんと話しこんでいた。その中にありこんだわけである。だんだん話がはずんでいくうち、

「毛利初代高政が佐伯に来て城山に築城するとき、彼の宿舎が、国道二一七号線カトンネル近くにあった。それであすこと「仮ノ屋」という。そしてこの後の公民館のあるところが「偽屋の前」という。

「それはおもしろい話ですなあ」
「それと關係があるのですよ。この白坪山のれ合目ちかくの坂ノ浦側は、中一五〇メートルの道が、白濁の狭道トンネルの付近まで続いている。なんでも火よけの道が、戦争時の逃げ道ではないか、と伝えている。」

二人は交互に話しつづけた。

「それは、水銀を掘った時の道ではないですか」
「いいえ、水銀の道は発掘中の時を私達はかぎっていません。うんと下の方です。」

草の枯れた頃、区長の片刈さんから、その道を案内してもらったことを約束した。よいお土産をもらったようない気持で、お礼を言うて別れを上げた。

○白坪山 (二二二)

富川の地名辞典刊行事務局に送った私の原稿に「白坪」とルビをつけたところ、すをしい赤エンピツで訂正し

た。

て(はじ)と引いている。

さう、その市役所の固定資産税係に電話したところ、あ
いまいな答えしかかえってこない。そこで区長さんに電
話したところ、「それはうすつてです」と明確に答えた。
「今の若い者はうすつてばよいですが、おれは早く話
すために言っているのです」と。

その後、念のため市役所に勤めている知人に話した
ところ、「私連日、ふいふと云いますなあ。土地の人
がどう言うか知りませんが、何を基準にするか問題です
なあ」と。

私に結局、昔から呼んでいた所の人の「うすつて」と
再度書いて提出した。

◎石打瀑

堅田地方の地名については、会員佐脇費一氏の「佐伯
地名考」と参考をさせていた。実地の検証については、
波越の痕跡の検証がすでに、石打瀑に向った。山路を

話しながら、かなりの道のりを登ると、道が二つに分れ
ていたのでちよつと迷った。右手の方に最近道を開いた
形跡があるので、そちらを迷んだ。

道がだんだん広くなっていくにつれ、滝の水音が聞こ
えてきた。
パツと眼前に展開した滝は水勢がよく、ほどよい長さ
に腰が少し折れて変化に富み、いながら水墨画を思わせ
るものであった。

石打瀑のことを「豊後国志」にこう書いている。

「佐伯葦石打村に在る。瀑勢湍湍に随つて盤桓数回、
流下宛白龍窟を出て跳来するが如し。」

とある。著者唐橋世済は兩藩の儒医で、明和から寛政年

間に生きた人であるが、江戸にも交友を多くもち、多才
な人であった。そのうちの一人森春樹について、唐橋世
済自ら「豊後国志」の冒頭の凡例に、次の如く記してい
る。

「每郡輯録の所、必ず其郷人好事者の諮詢に就て、教
人の手を経て成す。是を以て事物正當、詳録有る無
し。森春樹の如く、其功勞多く居る。」

(「豊後国志」解題 芥川龍男による)

右の如く著者唐橋世済は、何人かの編集委員長格で調
査・検証しているが、石内瀑については的確な表現に敬服
した。二百年をこす時の流れとともに、石内瀑の水も休
むことなく流れつづけて、見る人々として著者と縁を結ぶ
つける不思議を思わざるを得なかつたのである。

◎齋藤大橋

OBの辞典(注)大分県百科辞典刊行、その執筆依頼を
受けている)の方では、佐伯市以外のことと調べればなら
なかつた。

中江川の傍らに新設成った建設省の工務課を訪ねた。
一昨年鶴岡高校土木科と卒業した戸篠農がいる。彼は在
学中図書委員長をしていて、私とは切っても切れない間
柄である。

用事がすんで彼のデスクで話していると、周りの著者
も話しかかあった。一人の青年が、「こんな本も役に立
つんどやないですか」と言つて持つて来た。「日本全河
川ルーツ大辞典」の中に、齋五川について次のように書
かれている。

「一番近とは中世の大工のこと。この川が大工のもの折
尺のように曲りくねっているので、名が出来たという説
がある。本当だらうか。中世佐伯氏の梅牟礼成への関

門にあたる河岸に番匠の集落がある。大工集団の移住地がそれとも番匠の位置か。川名がこれから出たのかもしれない。昔はこの付近から河口までを番匠川といつた。今、上中流部を占める本匠村は、合併のさい番匠川の元である意で名づけられた。

番匠川について、これほど詳しく説明のある記事を、まだ見たことがなく、ちよつとしたこととてよい本を、一青年から紹介してもらって感謝したものである。

○官島かんとう

海崎を経て上浦町へ行く途中の、二七号線の道路から、古江分岐手前からもよい。海上約一キロ向うに適當の距離をおいた、美しい島が二つ並んでいる。三十九年もまえに旅行通から聞いた話には、佐伯地方の海岸の美しさは、日本でも珍らしいといつたのは、この辺のことろではないかと思ふ。

見る位置によつて違ふと思ふが、手前で見えるのが官島、向うが地の鼻である。地図上では北が官島、南が地の鼻。ところで、二万五千分の一の地図でも五万分の一の地図でも、官島と書いてある。しかし、市役所の係の人も、ところどころ官島と呼んでいる。字はいつのまにか変えられていくものだが、この場合も官と官とすりかえられて、公の地図に記載されるようになったのである。

大切なことだと思つたから、前川の刊行本部に、「地図に官島と書いてあるのは誤り、官島が正しい」と一付け加えて送つた。もう少し調べて確信を得たら、国土地理院に連絡しようと思つている。

○竹々島 (高さ三三六九・燈台一)

佐伯湾については、海上保安所にかぎると思つて、港にある海事官庁事務所を訪れた。一人の方と話していると、傍で仕事をしていた友人も加わつて話題が広がっていく。

「どうして竹々島というんでしようか」

「そうねえ、とにかくあの島は竹が多いですわね。それ、あそこには江戸時代の年号のいつた石碑が倒れかけていますよ。何か書いていますか読めません」

「それは珍らしい話です。行ってみたいですねえ」

「それはやら坂部さんがちかちか行きますので、案内してもらつたらどうですか」

「それじゃ、僕がよい月を連絡しますはう」

それから十日ばかりたつた頃、家に電話があつたので、羽柴・清田両先生に電話したところ、二人とも翌日の日曜であつた。私も急ぐ仕事を止めたすけと思つたから催促もせず、今日におよんでいる。

大入島の实地調査は、平川繁氏にお願ひした。氏は日向泊出身で、久しく大入島支所長をされた。本会員でもあり、公署道法佐伯市民会議議長である。大入島一周の車の中で、竹々島についての想ひ出を聞いた。

昭和五年頃、竹々島で大入島の入連が、海藻を多く採つていふ。当時この島が中浦村に現在鶴見町のものか大入島のものか所屬がはつきりしていなかつた。氏は、豊後要塞司令部に測量許可申請をして、一週間ばかりかけて測量した。

こうして、大蔵省に固有地松下げ申請した結果、大入島大字荒網代宮東島の何番地と、現在佐伯市の所屬に登錄されている。

私は正確を期するため、市役所の固定資産係にきいた

ところ、自信のない声で、「あれは鶴見野のものでしよう」という電報であった。そこでヤッパを鶴見野役場に電報したところ、即座に「それは佐伯市の所屬になっています」と返答があった。再び市役所にその旨を伝えたのち、「しっかししてもらわないと困りますよ」とつけ加えた。

平川氏は、わが国と隣国との間にある竹島問題がおきると、五十年前のことが思い出されて、「佐伯の人はこの経緯を知ってもらいたいと思うことがある」と話されていた。

（ここで津久見市内についてのことがつづくが、ページ数の關係から割愛させていたたく。寛恕を乞う）

この夏、津久見市は何日か行くうち、佐伯市にくらべて、なんとなく歴史の風土がうすい感じがした。寧ろ、津久見の市役所の人々が口をきいて話している。

津久見市は、狭い谷底のような土地に、セメントに不用な灰土を深い海に捨て、陸地を造成しなくてはならぬ宿命を持ってゐる所だ。これほどはつきりど、自然と人間の關係を示すと、これは少ないと思う。

私は「地理」という意味が、単純明快で、津久見市においてまわっていると思う。

（そえがき）

今回の百二十一号で羽柴先生の手書きの「佐伯史話」が、終りにあることを聞いて、感無量なものがおりました。十五年前という年数といはず、五百部という量といはず、拙力で今日まで続けてこられた例は、日本中やがしてどれほどあるでしょうか。先生ご自身「一切のが楽しいから」とおっしゃる気持ちは、私にもわかるような気がいたします。外から見るほど苦痛だったから、早くダウンして

るはずですが。それにしては、肉体的な精力の消耗は、はかり知れぬものがあつたことは事実です。

今後、活版印刷の「佐伯史話」を讀む人は、手書きのプリントより良い点を気がおられると思います。

しかし、原稿の内容にその土地の工夫、略図も先生のおもしろさ、統計、図表のたしかさ、枕字やとくにむずかしい漢字の取扱ひ、仮名づかいの手入れなど、行間にはじを思ひやり半減することばかりです。第一冊子全体の暖かさ、芸術的な雰囲気がいまじよう、羽柴先生の種類が、次の百二十二号から見られなくなることは確かです。

私たちが雅拙を、難解な文章表現を整えて下さつたからこそ、今日まで人に読んでもいたなき、実力以上に評価されてきたのではないうか。少くとも私の生の原稿と、出来上つたプリントと讀みくらべて、そう思うのです。「七つはめ、三つ吹れ」という兒童の教育方法によつて、私達は互いに育ち、成長してきたとちがいますようか。私はこそ思えてなりません。

そうした意味で、感無量なものがあります。今回を最後に書きつめたのは、ゆれぬところまでやったという、ギリギリのところで、最後まで努めてこられたのです。どうぞ目とお体を休ませて下さい。

百二十一号の記念号に雅文を書かしていただいて、ほんとうにありがたうございました。

（おわり）

— おわびとこと —
あくまで原文の文章遣ひ、漢字の使ひかた、仮名づかいを正したり、読みやすく理解しやすいうち、分節と考えたりして、文章ととのえたことばかりです。ご了承下さい。
この市野頭先生の所えがき、ありがたう。ちと面白くない点はおりますが、私にはおもしろいので。
（羽柴）